

女子美術大学アート・デザイン表現学科 3年次・選択

メディアクリエーション演習 (金曜日特別授業)

批評理論について 2
～ 「テキスト主義」の系譜と受容理論
(講義第6回：2016-12-16)

担当： 石井 拓洋
takuyo.ishii@gmail.com

2016

【資料内の表記について】

- ・「」内は著作物からの引用
- ・〈〉内は専門用語、一般用語、語の強調。
- ・※印以下の記述は、石井の考えを多く含むもの
- ・[]内は、石井による補足

批評理論の概観

「テキスト主義」か、「コンテキスト主義」か？

または、作品の価値を判断すべきは

「作品自体」にか、「社会との関わり」にか？

なぜ、〈文学〉の批評なのか ？

「文化は言語である」ため

- 〈記号〉が 外界の認識をつくるから
- 〈記号〉の中でも、〈言語〉が、十全にその機能を果たすから
- 「文化は言語である」 (≠ 言語は文化である) 池上嘉彦

「さまざまな文化的対象や現象の中で、言語が特権的な地位を占めるものとして意識されている
ということ —— つまり、『文化は言語(のようなもの)である』と捉えられうるということ ——
は十分に明らかであろう」 (池上嘉彦『記号論への招待』30頁。)

文学批評史概観

「作品自体」か？ 「社会との関わり」か？

「テキスト主義」

「コンテキスト主義」

- ・ 19世紀末：英国ケンブリッジ大学に、大学史上初の「文学講座」ができる
- ・ 19世紀末：印象批評、道徳的批評、伝記的批評、マルクス主義批評（コンテキスト主義的）
- ・ 1910年頃：〈ロシア・フォルマリズム〉の批評（テキスト主義）ヨーロッパ
- ・ 1920年～50年頃：〈新批評〉（テキスト主義）アメリカ
- ・ 1950年～70年頃：〈構造主義批評〉、〈テクスト論〉の批評（テキスト主義）仏、米
- ・ 1970年～：〈受容理論〉、〈読者反応批評〉（コンテキスト主義）独
- ・ 1980年～：〈脱構築批評〉、〈精神分析批評〉（テキスト主義？ コンテキスト主義？）仏、米
- ・ 1990年～：〈新歴史主義批評〉、〈マルクス主義批評〉の系譜（コンテキスト主義）英、米

文学批評史概観

「作品自体」か？

「テキスト主義」

「社会との関わり」か？

「コンテキスト主義」

- ・ 19世紀末：英国ケンブリッジ大学に、大学史上初の「文学講座」ができる
- ・ 19世紀末：印象批評、道徳的批評、伝記的批評、マルクス主義批評（コンテキスト主義的）
- ・ 1910年頃：〈ロシア・フォルマリズム〉の批評（テキスト主義）ヨーロッパ
- ・ 1920年～50年頃：〈新批評〉（テキスト主義）アメリカ
- ・ 1950年～70年頃：〈構造主義批評〉、〈テキスト論〉の批評（テキスト主義）仏、米
- ・ 1970年～：〈受容理論〉、〈読者反応批評〉（コンテキスト主義）独
- ・ 1980年～：〈脱構築批評〉、〈精神分析批評〉（テキスト主義？ コンテキスト主義？）仏、米
- ・ 1990年～：〈新歴史主義批評〉、〈マルクス主義批評〉の系譜（コンテキスト主義）英、米

「テキスト」と「コンテキスト」

テキスト text

「なん人かによって そこから意味がよみとられることによって、一個の『表現体』」
となるもの。 (池上嘉彦『記号論への招待』29頁)。

「ある作品の本文。〔中略〕最近はとくに、作品 (work) という言葉があらかじめ作者を予想させるために、作品という語を避けて、より中立的な テキスト の語を使うことが多い」 (川口喬ら「コンテキスト」『最新文学批評用語辞典』202頁)。

コンテキスト context

「『文脈、前後関係、背景』の意」 (川口喬ら「コンテキスト」『最新文学批評用語辞典』202頁)。

〈ロシア・フォルマリズム〉の批評 : 1910年頃～1920年頃

言語は新たな外界認識をつくる : 言語の「詩的機能」

「テキスト主義」

- ・ 印象批評や道徳批評の 非科学的側面を批判
- ・ 「コンテクスト主義」 を 還元化
- ・ 言語の機能や技法にのみ着目 — ローマン・ヤコブソン (1896-1982)
- ・ **〈異化効果〉** : 日常的な受容 (自動化) を避け、新たな受容をうながす言語表現
例) 「 焰のつらら」、「四角い地球」、「ダイヤの溶解」

「対象を見慣れぬものにし、形式を複雑にし、知覚のプロセスをより長く困難にすること」
シクロフスキー

〈新批評〉 new criticism : 1920年頃～1930年頃

作品それ自体を対象とした批評

「テキスト主義」

- ・ 作家の伝記的背景、社会的背景を考慮しない。
- ・ 純粹に、作品それのみを批評対象とする。
- ・ 「意図に関する誤謬」と「情動に関する誤謬」： 作者の意図や情動を排除
- ・ ウィムザットと ビアズリー が主唱者。 アメリカ南部文学から拡大する。
- ・ ただし人間が理性的に統一されたものとする前提にもとづいた批評（F、ジェイムソン）。1960年代以降の〈構造主義〉による主体性批判において疑問視される。

〈テクスト論〉 : 1960年～70年代_「作者の死」と「作品からテクストへ」

ロラン・バルト Roland Barthes (1915-1980、仏)

- 思想家、批評家。
- ソシュールの言語観を継承し、批評活動をおこなう。



画像: 土田知則ら『現代文学理論』20

〈テクスト論〉 : 1960年～70年代_「作者の死」と「作品からテクストへ」

ロラン・バルト 『作者の死』(1968)



「〔作者が〕仮に自己を表現しようとしても、、、
彼が《翻訳する》つもりでいる内面的な《もの》とは、
それ自体、完全に合成された一冊の辞書にほかならず、
その語彙は他の語彙を通して説明するしかない。
それも無限にそうするしかない」(p.86)

→ 作者や作品が、脱中心化し、関係論的に認識されている

〈テキスト論〉 : 1960年～70年代_「作者の死」と「作品からテキストへ」

ロラン・バルト『作者の死』(1968)



作者は、自己の創造性のみによって創作するものでもなく、したがって、自らの作品の意味を保証するような中心的・優先的な立場とはならない。

「テキストとは、無数にある文化の中心からやって来た引用の織物である」(pp.85-86)

「一編のテキストは、いくつもの文化からやって来る多元的なエクリチュールによって構成され、これら、、、は、互いに対話をおこない、他をパロディ化し、異議をとねえあう。

しかし、この多元性が収斂する場がある。その場とは、、、作者ではなく、読者である。読者とは、あるエクリチュールを構成するあらゆる引用が、一つも失われることなく記入される空間にほかならない。

あるテキストの統一性は、テキストの起源ではなく、テキストの宛て先にある」(p.88-89)

〈テクスト論〉 : 1960年～70年代_「作者の死」と「作品からテクストへ」

ロラン・バルト『作者の死』(1968)



「読者の誕生は、『作者』の死によって
あがなわれなければならないのだ」 (p.89)

「作者」の中心性・優越性が失われ、一方で、
「読者」こそが、作品から多様な意味を生み出しうる場となる。

→ 「創造的読み」が許された読者の誕生。作品の創造に参加する「読者」。

〈テキスト論〉 : 1960年～70年代 _ 「作者の死」と「作品からテキストへ」

ロラン・バルト 『作品からテキストへ』(1971)



〈テキスト論〉 : 1960年～70年代 _ 「作者の死」と「作品からテキストへ」

ロラン・バルト 『作品からテキストへ』(1971)



作者が意味をつくる「作品」から、読者が意味をつくる「テキスト」へ

「作者は作品の父であり、所有者であると見なされる。
それゆえ、、、文学の科学は、作者の原稿や表明された意図を尊重する」(p.99)

「『テキスト』は、その父親の保証がなくても読むことができる。、、、

『作者』が、、、自分のテキストの中に、《もどれ》ないということではない。
ただ、そのときは、いわば招かれた客としてもどるのだ。

彼〔※ = 作者〕の記名は、もはや特権的、父性的、真理論的なものではなく、
遊戯的である。彼はいわば紙の作者になるのだ。彼の人生は、、、一個の創作となる」
(p.100)

〈テクスト論〉 : 1960年~70年代_「作者の死」と「作品からテクストへ」

◀ 前へ 次へ ▶ 1 / 1件

物語の構造分析



モノガタリノコウゾウブンセキ
ロラン・バルト著, 花輪 光訳 (BARTHES, ROLAND.)
東京: みすず書房, 1987
[Amazon.co.jp](https://www.amazon.co.jp)で詳細を見る

この本に以下が収録

- ・「作者の死」
- ・「作品からテクストへ」

ブックマーク

● 所蔵 :

	巻号	刷年	所在	請求記号	資料ID	状況	予約・取寄	予約人数	備考
1 <input type="checkbox"/>			相図: 開架	954 B25	158313		<input type="button" value="予約"/>	0	

全て選択

選択解除

巻号ブックマーク

しかし、本当に、テキストのみで
解釈が可能なのか？

「作者は死んだ」のか？

問 1

この詩からどのような世界が見えてきますか？

古寺に

斧こだまする

寒さかな

問 1 この詩からどのような世界が見えてきますか？

古寺に
斧こだまする
寒さかな

この詩の作者はコンピュータ。つまり、これはコンピュータ・プログラムが、
たまたま生成した文字列。これを**知る前後で、多少でも印象が変化するの**はなぜか？
その変化が示唆するのは、「読者」は、「テキスト」（作品）解釈の時、自らのうちに、
ある「作者」像を想定することで、解釈の正当性を得ているのではないか？

参考：黒崎政男『哲学者はアンドロイドの夢を見たか』p. 121.

問
2

「12」の次にくる数字は何
？

2, 4, 6, 8, 10, 12, → 次は ?

問
2

2, 4, 6, 8, 10, 12, → 次は ?

「12」
の次にくる数字は何
?

いかなる数字も考えられる。ここで「14」と回答する人は、自らのうちに、「2つつ加算する」という意図をもった、〈統一性を指向する作者〉の存在を無意に想定している。一方、もし、かかる作者を想定しなければ、つまり、純粹に「テキスト」のみで解釈するならば、どのような数字でも考えられることになる。

したがって、「テキスト」（作品）解釈は「読者」のうちに、統一性を志向する「作者」の存在を想定しなければ 解釈できないとも考えられる。

参考：竹田青嗣『言語的思考へ：脱構築と現象学』p. 246.

問
3

$$68 + 57 = 125$$

$$68 + 57 = 5$$

正しいのはどれ
？

問
3

$$68 + 57 = 125$$

$$68 + 57 = 5$$

正しいのは
どれ
？

いずれも正しいと考えることも可能。理由は問2と同じ。上のみを正解とするのは、「+」（プラス）という概念を正確に使用せねば気がすまない架空の「作者」の存在を想定するから。一方、たとえば、「+」の記号を「クワス」と読む異星人がいたとして、彼らにとってこの記号は「ある数に加算する数が 57 を超えるとき、答えはつねに 5 である」という概念であったならば、その場合は、下の式もまた、正しいことになる。すくなくとも、この問いだけでは、つまり、「テキストのみ」（作品のみ）からでは、「クワス」の可能性を否定できない。

いずれにしても、「テキスト」（作品）解釈には、「読者」は「作者」を無意に想定している。

参考：ソール・クリプキ『ウィトゲンシュタインシュタインのパラドックス：規則・私的言語・他人の心』

- さらなる知識のために (受容理論、その他、批評理論全般の初歩的な知識習得のために)
- 筒井康隆『文学部唯野教授』東京:岩波書店、1990年 (小説。物語内での唯野先生の批評理論講義は確かな内容。痛快でためになる。受容理論講義あり)。
- 丹治愛編『批評理論』東京:講談社選書メチエ、2003年 (様々な批評理論の解説と、それぞれの批評的視点による分析の実践例。受容理論解説あり)。
- 廣野由美子『批評理論入門:「フランケンシュタイン」解剖講義』東京:中央公論新社、2005年
(様々な批評理論の解説と、それぞれの批評的視点に基づいたフランケンシュタインの分析。わかりやすい。受容理論解説 [読者反応批評] あり)
- 土田知則ら『現代文学理論:テキスト・読み・世界』東京:新曜社、1996 (読みやすい概説書。受容理論解説 [読者の誕生] あり)。
- テリー・イーグルトン『新版・文学とは何か:現代批評理論への招待』東京:岩波書店、1983年=1997年
(本格的に学びたい人は必読。基本資料として位置づけられるもの。受容理論解説あり)。
- 大橋洋一『新文学入門:T・イーグルトン『文学とは何か』を読む』東京:岩波書店、1995年 (示唆深い良書。受容理論解説あり)。
- 川口喬一・岡本靖正編『最新・文学批評用語辞典』東京:研究社、1998年 (手軽で適切な文化批評用語辞典として)。
- ジョゼフ・チルダーズら『コロンビア大学・現代文学・文化批評用語辞典』東京:松柏社、1995年 =1998年
(本格的に学びたい人は揃えたい辞書)。
- 菅原教夫『現代アートとは何か』東京:丸善ライブラリー、1994年
(批評理論を知るための大前提。批判的に検討すべき「西欧近代主義」についての基本的な知識のために。第2章と3章を読みたい)。
- 鎌田首治朗「イーザーの読者論再考」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第62号、2013年。
(学術論文だが、初学者がヴォルフガング・イーザーの受容理論を知るためにも最適。読みやすく優れた論文)。

以上